

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01411

研究課題名（和文）アジア・太平洋地域におけるイレズミ研究の再構築：感覚・情動・力から照射する身体

研究課題名（英文）Reconstruction of the study of tattoos in Asia-Pacific: The body from perspectives of sensation, affect, and power

研究代表者

津村 文彦 (Tsumura, Fumihiko)

名城大学・外国語学部・教授

研究者番号：40363882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジア・オセアニア地域におけるイレズミについて、人とモノと制度の観点から分析し、感覚と情動と力の検討を通じて、イレズミが人々におよぼす力と、個人と社会を結節するあり方を明らかにしようとした。日本（本州・沖縄）、台湾、タイ、カンボジア、仏領ポリネシア、ニュージーランドなどでの現地調査で得られた民族誌的データに基づいて分析を行った。マシンやインクの導入やSNSでのデザインの参照などグローバルに共通する動きがありながら、身体とモノの融合であるイレズミが、個々の社会的制度の枠内で、文化的背景をもとに地域ごとに異なる情動を喚起させ、タトゥーの社会的布置が構成されている様子が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、本研究は、欧米中心に論じられてきたタトゥーに関する文化論を、非西洋社会を対象にして再構築した点が挙げられる。西洋社会では「逸脱」論、非西洋社会では「伝統復興」論に偏っていたが、それぞれの民族誌データから論じることで、地域に根ざしたタトゥー文化論が可能となった。またイレズミの比較文化論を出版することにより、日本人のイレズミ理解に新たな知識を加えた。2013年の温泉地でのイレズミのある外国人の入浴拒否、2015年以降の医師免許のない彫り師の検挙など、イレズミは社会問題化しているが、グローバルな同時代的状況についての研究成果を発信することで、文化多様性の寛容に寄与した。

研究成果の概要（英文）：This study analysed tattoos in Asia and Oceania from the perspectives of people, objects and institutions, and attempted to clarify the power that tattoos exert on people and the ways in which individuals and society are linked through an examination of emotion, affect and power. The analysis was based on ethnographic data obtained from field research in Japan (mainland and Okinawa), Taiwan, Thailand, Cambodia, French Polynesia and New Zealand. While there were common global movements such as the introduction of machines and ink and references to design on SNS, it became clear how tattoos, the fusion of body and object, evoked different affect in different regions based on cultural backgrounds within the framework of individual social institutions, and how the social fabric of tattooing was constituted.

研究分野：文化人類学

キーワード：タトゥー イレズミ 身体変工 アジア・太平洋地域 感覚 情動 身体

## 1. 研究開始当初の背景

本研究はイレズミに関する人類学的研究である。皮膚のなかに色素を入れて着色する身体変工について、日本語では刺青、入墨、タトゥーなど様々に呼んできたが、特定の地域や文化の含意から逃れるため、本研究では「イレズミ」の語を使用する。

従来のイレズミをめぐる人類学的議論は次のように概括できる。すなわち (a)「他者」の身体変工、(b)社会構造の象徴、(c)文化復興の3つの観点から論じられてきた。(a)「他者」の身体変工は、人類学の勃興期より太平洋地域やアフリカなど非西洋世界の記録が蓄積されてきた。イレズミを「未開」や「異文化」の表象とみる博物学的記述が主で、現在も同様の関心から多くの図案集が出版されている。(b)社会構造の象徴として解釈するものも、非西洋世界を対象とすることが多い。イレズミ図案の分析から二項対立的な文化構造を読み解くもの、自己と他者の境界の表象として解釈するもの、人と描かれたモノとの相互作用を分析するものなどが知られるが、いずれも当該社会の何らかの表象として分析するもので、イレズミ自体を問題化することはなかった。(c)文化復興の議論は、非西洋世界と西洋世界の双方に関わる。特に1960年代半ば以降のアメリカ西海岸を中心に、電動タトゥーマシンの普及や対抗文化の隆盛に伴って「モダン・プリミティブ」への関心が高まると、西洋タトゥーは太平洋地域や日本のイレズミを積極的に導入した。同時に世界各地で地域アイデンティティの象徴として、イレズミが文化復興の文脈で再評価される。だがこうした議論の多くは欧米社会の状況との接点が不問のままであり、非西洋世界は一面的に描かれる傾向にある。

一方、現代の欧米社会を対象とする社会学的議論は逸脱論に関わるものが多い。イレズミが「異常」と扱われるあり方を問うことで、「正常」な社会の前提を鮮明化することがその目的である。しかし欧米社会を中心とする「逸脱」の視角は、その他の社会における多様なイレズミ理解を阻害するものと言える。

このように研究開始当初の背景としては、イレズミ研究は見られるものの、先行研究の視角には上記のような偏りが見られた。

## 2. 研究の目的

上記の学術的背景を踏まえて、本研究では、従来の研究が扱ってこなかった諸点に注目した。すなわち、アジア・太平洋地域において、人とモノと制度の観点から当該社会におけるイレズミの布置を検討することを通じて、イレズミがもたらす感覚、情動、力のあり方を明らかにすることである。つまり、近代の知識と法的規制が浸透したグローバル社会において、身体感覚を随伴するイレズミは、人々にいかに感覚され、人々の情動をかき立てるのか。またそれはいかなる社会関係を編成させるのかを問うことが本研究の目的である。

イレズミを、単に社会構造の表象と捉えるのではなく、感覚、情動、力という3つの視角から分析することで、個人の知覚的側面から、感情や審美的側面、さらに社会の権力関係までを、俯瞰的に論じることを目指した。

第一の 感覚 のうち、イレズミに深く関わるのは皮膚への異物の侵襲時に知覚される痛みである。人類学は痛みに耐えることを成人儀礼と結びつけ、精神病理学は自傷行為との関連で理解してきた。しかし知覚の文化的基盤を重視する「感覚の人類学」によると、感覚は文化的多様性をもつ。たとえば、タイの呪術イレズミであるサックヤンは、近年は痛みの少ない電動マシンを使って施術されるが、外国人観光客は痛みがより強く時間もかかる彫り針での手彫りを求めることが多い。「痛み」とイレズミの呪術的效果の関係は一義的なものではなく、イレズミをめぐる人々の感覚に注目する必要がある。

第二の 情動 とは、身体的な表出を伴う感情の動きで、言語化は困難なことが多い。たとえばイレズミをめぐる好悪や美醜をめぐる感情がその一例となる。社会への関心が強い人類学は、評価や審美的な感性を含む情動にあまり関心を払ってこなかった。しかし、イレズミは、グローバルな規模でコンベンションや展示が開催され、アートとしての肯定的評価が確立する一方で、個別社会では好悪や美醜をめぐる多様な価値づけが行われる。つまり情動は個人と社会の境界に位置する。この観点から、イレズミのある人の入浴可否をめぐる、日本の温泉タトゥー問題などで、個人と社会との結節点の探求が可能となる。

第三に、 力 とは、イレズミそのものが、個人や身体の様を超えて、強力なエージェンシーをもつことを意味する。イレズミは、個人が感覚的に経験し、個人に情動を喚起するものだが、同時に社会的なネットワークに常に埋め込まれている。たとえば、上述のサックヤンは、攻撃や防御、誘惑などに関わる呪文を彫るもので、その力の保持には呪術師への篤い信仰が不可欠となる。イレズミの力は、仏教や呪術への信仰に連なることで、世俗の権力関係には見られない聖性を帯びる。こうしたイレズミと力との関係を描くことで、イレズミを起点とする、地域に固有の身体=権力論を展開することができる。

これらの視角を複合的に用いることにより、上記の問いに迫ることが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

#### (1) 当初の予定

上述の目的に迫るため、現地調査から民族誌的データを収集する。本研究では複数地域の比較可能性を担保するため、人とモノと制度の3つの観点に注目して、年次ごとにデータを収集・整理し、個人の感覚、情動から社会の権力関係までを俯瞰的に論じることを目指した(表1)。

表1 本研究の研究対象

	人	モノ	制度
痛みなど感覚	彫り師、クライアント	道具、身体	
好悪など情動	クライアント、部外者	デザイン、施設	博物館展示、法制度
イレズミの力	彫り師、クライアント		SNS、地域間交流

2020年度は「人」に注目した。イレズミを求めるクライアント(彫られた人)だけでなく、施術者である彫り師(彫る人) および直接イレズミに関与しない人々(見る人)も対象化する。彫り師についてはイレズミに関する知識と技術の修得過程のほか、イレズミ以外の他の実践も検討する。刺青に直接関与しない部外者については、イレズミに関する言説を収集する。また調査地のインフォーマントと良好な関係を作り、次年度以降の調査に向けた基盤整備に努める。

2021年度は「モノ」に注目する。彫り針やインクなどの道具のみならず、身体、デザイン、関連する空間や施設も対象とする。近年のマテリアリティをめぐる議論では、モノは見る者に畏怖や魅惑など感情や情動を含めた反応を引き起こすようなエージェンシーとされる。本研究でもモノのエージェンシーに着目し、それが引き起こす感覚的経験と情動について、彫り師およびクライアントを中心に聞き取りを行う。

2022年度は、「制度」に注目する。調査対象地域におけるイレズミの法的位置付けをめぐって情報を収集し地域間比較を試みる。また2000年代以降に活発化した、地域間の相互交流(コンベンション、博物館展示など)およびSNSがもたらした変化について彫り師及びクライアントから情報を収集し、イレズミの現代的諸相を具体的に描き出す。

最終年度の2023年度は、前年度に引き続き、国内外の学会での研究発表、国内外の学会誌への研究論文の投稿を積極的に行うことで研究成果を公にすることに努める。

本研究は複数地域の比較検討を行うため、主に6名で研究活動を進める。各メンバーの調査対象国・地域は表2の通りである。調査対象地域は東アジア(日本・沖縄、台湾)、東南アジア(タイ、ミャンマー、カンボジア、ラオス)、太平洋地域(ニュージーランド、タヒチ)に分けられる。民族構成も文化背景も大きく異なるが、グローバルな交流のなかで新たなつながりを生成しつつある諸地域を対象として、イレズミの社会的布置や法的規定の違い、地域間の相互作用、さらに違いを超えた普遍性を明らかにすることを意図した。また他地域の状況を詳細に捉えることで、日本のイレズミをめぐる社会問題を相対化する視角を得ることも念頭に置いていた。

表2 研究組織

氏名	区分	調査対象国・地域	調査対象例
津村文彦	代表者	タイ、ミャンマー、カンボジア、ラオス	仏教僧侶やバラモン教隠者による呪術イレズミ
桑原牧子	分担者	仏領ポリネシアのソサエティ諸島、タヒチ島およびマルケサス諸島	イレズミ施術現場における痛みの認識とイレズミに関する情動
山本芳美	分担者	沖縄、台湾	伝統的なイレズミを復興させる彫り師とクライアントの動向
大貫菜穂	分担者	日本	顧客・彫師・イレズミ制作およびデザインの相互作用
山越英嗣	分担者	日本、沖縄	若者のタトゥー・ムーブメントと民間信仰の関係
南玲子	協力者	ニュージーランド	先住民マオリ及び交流のある他先住民のイレズミ

#### (2) 新型コロナウイルス感染症の影響による計画の変更

しかしながら、研究開始直前から、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生した。世界各国で国境を越えた人の移動が制限され、フィールド調査に基づく民族誌的調査をデータ収集の方法論としていた当初計画は大きな変更を迫られることとなった。本研究の主題であるイレズミ実践は人と人の直接的接触を伴うものであるが、外出制限のみならず、「ソーシャルディスタンス」が強く求められることとなった社会状況のなか、新規のデータ収集は国内・国外を問わず困難を極めた。

2020年度および2021年度は、わずかな国内での調査を除けば、フィールドでのデータ収集は

不可能であった。そのため、最初の2カ年は文献調査およびフィールドデータの整理を行いながら、研究代表者と研究分担者はそれを論文にまとめ、イレズミ研究の現状を広く世に知らしめるべく論文集(4-(2)研究成果の出版)を出版することとした。その後、2022年度より、少しずつフィールド調査を再開しながら、最終年度までデータ収集を継続して行うこととなった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 全般的な成果

2020年度は、彫り師やクライアントなど「人」に注目して研究を開始させた。知識と技術の習得過程、イレズミをめぐる言説や情動を対象とするとともに、次年度以降のフィールド調査に向けた調査基盤の整備を行う予定であった。だが、新型コロナウイルス感染症の影響により、当初計画していた海外・国内でのフィールド調査を行うことは困難となったが、文献調査や研究期間の延期などによって対応を行った。

津村は、実施時期を延期してタイ、カンボジア、ラオスにて呪術的イレズミの現地調査を実施した。特に東南アジアにおける、伝統文化としてのイレズミ保護の取り組みの情報を収集した。桑原は、マルケサス諸島における戦士のイレズミに着目して研究し、社会変化による集落間の戦争の増減が戦士のイレズミの形状にいかんにか反映したかを16世紀から20世紀初頭の史資料を使って考察した。山本は19世紀末に外国人客に施術した彫師「彫千代」こと宮崎匡に着目し、英米で刊行された新聞記事や滞在記などから、施術の様子を分析した。大貫は、「日本伝統刺青(ほりもの)」のイメージ形成を探るべく、東映太秦映画村・映画図書館にて、文献調査と当時の映像制作スタッフへの聞き取り調査を行った。山越は、現代日本社会のタトゥーをめぐる状況について英語論文の執筆を行った。

2021年度は主に「モノ」に注目した。タトゥーマシン、インクなどの道具、身体、デザイン、関連する空間や施設も対象として研究を進展させた。前年度と同様に新型コロナウイルス感染症の影響により、当初計画していた海外・国内でのフィールド調査は困難であったが、文献調査や研究期間の延期などによって対応した。

津村は、タイのバラモン系呪術師の宗教施設におけるモノの配置に注目した。特にワイクルー儀礼における憑依(コーンクン)の分析から、祭壇と神像・仮面などについて情報を収集した。また東南アジア各地に類似のマテリアリティが拡散していることに注目した。桑原は、マルケサスの伝統的なイレズミ施術において彫師が複数の道具を使い分けていたことに注目し、施術道具が改造電気シェーバー、さらにはタトゥーマシンへと変化する過程でイレズミ文様が変容したことを明らかにした。山越は、日本におけるイレズミに関連したコミュニティ形成についての議論を深化させた。山本は、国立民族学博物館小林保祥アーカイブを対象として、パイワン民族のイレズミ施術過程や道具の使用法の再現記録を含む1454枚の写真解説文を作成した。沖縄では2022年2月、3月に米軍基地の「門前町」であるゴザ周辺で、戦後沖縄タトゥー史について道具に比重をおいた聞き取り調査を実施した。大貫は、東映太秦映画村での調査を継続し、片岡千恵蔵の『いれずみ判官』シリーズおよび後継のテレビドラマ『名奉行遠山の金さん』シリーズの脚本、映像などに現れるイレズミについて調査した。研究協力者の南は、ニュージーランドのタ・モコ実践についての資料を収集した。

2022度は主に「制度」に注目した。調査対象国・地域におけるイレズミの法的位置付けをめぐる情報を収集し、当局の規制と運用について地域間比較を試みた。また地域間の相互交流およびSNSの利用がもたらした変化、および新型コロナウイルス感染の広がりに伴うタトゥー実践の変化について、彫り師及びクライアントを中心に情報を収集した。またこの年度より可能な地域から現地調査を再開させた。コロナ明けで、イレズミ実践についても多様な実践の変化を収集できたことは大きな価値といえるだろう。

津村は、2022年8月に約2年半ぶりにタイで聞き取り調査を行った。コロナ禍でロックダウンが行われている間に、特にバンコクの複数の占星術協会が宗教的知識のオンライン講座を開始したことがわかり、それらが地方の呪師や彫り師に影響を及ぼしている状況について情報を収集した。桑原は、タヒチで若手彫師を複数抱えるショップを追加して調査を行った。タトゥーマシンがコードレスのペン型になり、軽量で操作性も改善され、若手彫師の技術習得が容易になった。デザイン準備のためにiPadを使用するなどIT化の進展が伺えた。山本は、日本社会におけるイレズミ表現の扱いについて、1950年代初頭の映画検閲から検討する『映画倫理規程審査記録』から関連する記述を抽出して表を作成した。東映太秦映画村・映画図書館、神戸映画資料館で当時の映画と脚本、プレスシートなどの諸資料を確認し、メディア制度との関連を精査した。山越は日本社会においてタトゥーを入れる行為またはタトゥーを入れた身体が基点となり、いかなる出来事を引き起こすかという点について論文の執筆を行った。大貫は、日本の和彫りを取り上げて、技術交流について芸術学の観点から情報収集を行った。研究協力者の南は、2022年12月から1月にニュージーランドにおいて現地調査を実施した。彫師のライフスタイルの変化やタ・モコをめぐる国内の状況、国際的な先住民の協調について情報収集を行った。またこれまでの研究成果をまとめた論集(4-(2)研究成果の出版)を出版した。

2023年度は、本研究課題の総括を行うとともに、これまで延期していて不十分であった現地調査を補完的に行うことで、一次データの収集にも努めた。

津村は、2024年2月に東南アジアのタイとカンボジアにて呪術イレズミの調査を補完的に実施した。現地住民だけでなく、アジアの中華圏や欧米からの外国人についても宗教性を伴った呪

術イレズミの提供が行われている様子について情報を収集し、地域固有の文化的なイレズミがグローバルな人の移動に並行しながら拡散している様子を確認した。桑原は2023年8月と2024年2月に仏領ポリネシアのタヒチ島とマルケサス諸島又クヒヴァ島でイレズミの施術と彫刻の調査を実施した。さらに、2024年3月にニューカレドニアのグランド・テール島在住のタヒチの彫師とフトゥナ出身の彫刻家に聞き取り調査を補完的に実施し、イレズミの施術と彫刻の過程を参与観察した。山本は、東映太秦映画村・東映映画図書室から紹介された毛利清二氏(93歳)へのインタビューを、2023年3月より8日まで、計9回、45時間おこなった。毛利氏は、東映京都撮影所で80歳まで俳優に刺青を描く絵師として活躍した人物であり、2024年5月にはその成果を一般にも広く伝えるべく、おもちゃ映画ミュージアム(京都市)にて展示を行った(4-(4)イベントの開催)。山越英嗣は、2024年2月に那覇市でタトゥーショップの現地調査を実施し、那覇市のタトゥーショップの分布を巡って、国際通り周辺にそれぞれが一定の距離を保ち、すぐには目につきにくい路地裏に点在していることを明らかにした。大貫は、関西圏を中心に和彫りの彫り師への聞き取りを実施し、顧客とデザインの変化について情報を収集した。南玲子は、ニュージーランドにおいて、国際的な先住民の協調や相互の影響関係の中で変化するイレズミの現状について分析を行った。

## (2) 研究成果の出版

2020年度および2021年度はコロナ禍のために現地調査で新規のデータ収集が困難であったため、これまでのデータと文献調査により、研究メンバーの知見をまとめた、イレズミ研究の論文集を、本科研プロジェクトの中間報告の位置づけで、以下の通り出版した。

山本芳美・桑原牧子・津村文彦(編)2022『身体を彫る、世界を印す イレズミ・タトゥーの人類学』春風社、384ページ。

## (3) タトゥー文化研究会の開催

本科研メンバーを中心にタトゥー文化研究会を立ち上げ、研究期間中に下記の通り11回の研究会を実施した。科研メンバー外にも研究発表を依頼し、関連分野への研究関心の醸成を図った。また、日本文化人類学会による若手・アーリーキャリア研究者セミナー「人類学をベースにキャリアアップしよう：アカデミアの場合」(オンライン、2021年9月10日)において、研究会の広報を行い、当該研究領域への関心の拡大に努めた。

第1回 2020年9月7日 今年度科研の計画について	第7回 2022年10月9日 『身体を彫る、世界を印す：イレズミ・タトゥーの人類学』合評会
第2回 2021年2月22日 彭宇潔 「アフリカ狩猟採集民バカのイレズミ(タトゥー)及び社会関係」	第8回 2023年5月21日 山本芳美「米軍基地とタトゥー：コンタクトゾーンとしての古座」 南玲子「マオリのタトゥーの現状」
第3回 2021年3月16日 松嶋冴衣 「現代日本のジャグアタトゥー」	第9回 2023年6月12日 次回科研の申請の準備
第4回 2021年5月15日 大貫菜穂 「日本の美学(aesthetica)の頭れとしてのイレズミ画像研究 ディシプリンと研究の展望」	第10回 2023年7月31日 次回科研の申請の準備
第5回 2021年7月27日 山本芳美 「The Penn Museum コレクション所蔵の奄美大島・沖縄本島のハジチ道具」	第11回 2023年12月2日 ミカロヴァー ズザナ 「身体的主体性とタトゥーイング」
第6回 2021年9月14日 津村文彦 「タイのサックヤンにおける身体と語りと知」	

## (4) イベントの開催

本研究の成果を活用した一般向けのイベントを以下のように開催した。

2024年5月1日～7月28日

「毛利清一：映画とテレビドラマを彩る刺青展」(おもちゃ映画ミュージアム(京都市)、監修：山本芳美、協力：タトゥー文化研究会)

また本展覧会のプレ・イベントとして、2024年3月10日(日)に化粧文化研究者ネットワークと京都大学映画コロキウムとの共催で、第66回研究会「東映・刺青絵師 毛利清二氏に聞く『俳優に刺青(すみ)を描く(ながす)』とは」を京都大学にて開催した。山本が聞き手をつとめて、俳優に刺青を入れる過程について毛利氏にお話いただいた。会場の収容能力のため、関係者も含めて約80名が聴衆として集まった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山本芳美	4. 巻 47
2. 論文標題 沖縄の針突（ハジチ）と台湾原住民族のイレズミ 20世紀初頭を軸にした比較研究の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民族學界	6. 最初と最後の頁 5-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本芳美	4. 巻 63
2. 論文標題 「日本みやげ」としてのイレズミ：十九世紀から二十世紀初頭における外国人観光と彫師	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 43-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15055/00007727	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本芳美	4. 巻 25
2. 論文標題 小林保祥による日本統治期におけるパイワンのイレズミ施術記録と復元に関する予備的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 台湾原住民研究	6. 最初と最後の頁 148-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大貫菜穂	4. 巻 49(13)
2. 論文標題 受肉した肌をみる痛み：現代日本におけるイレズミと身体の感性学的受容論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 209-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津村文彦	4. 巻 54(4)
2. 論文標題 イサーンの森からの帰還：『ブンミおじさんの森』と精霊の民族誌	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 120-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsumura, Fumihiko	4. 巻 57(3)
2. 論文標題 Magical Efficacy in Sensory Experiences: Practice of Blowing Doctor in Northeast Thailand	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Meijo Bulletin of Humanities	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamakoshi, Hidetsugu	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 Living with Tattoos: A Case Study of Young People Managing a Hip Hop and Streetwear Store in the Tokyo Suburbs	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 115-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jrca.21.1_115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 津村文彦	4. 巻 49
2. 論文標題 書評：椋橋彩香著『タイの地獄寺』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東南アジア：歴史と文化	6. 最初と最後の頁 229-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5512/sea.2020.49_229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本芳美
2. 発表標題 小林保祥アーカイブの写真記録：パイワン・クナナウ、アマワン、クワルス社付近におけるイレズミ施術
3. 学会等名 第14回台日原住民族研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大貫菜穂
2. 発表標題 1990年代の時代劇にみるイレズミ表象とその受容：ドラマ『遠山の金さん』の表現に対する考察
3. 学会等名 表象文化論学会第15回研究発表集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 津村文彦
2. 発表標題 東北タイにおけるバラモン教の現代的潮流：モノ、巨像、SNSから考える宗教経験の変容
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本芳美
2. 発表標題 台湾原住民族パイワンにおけるタトゥー復興：太平洋の諸民族との交流に着目して
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 山本芳美
2. 発表標題 2010年以降における 沖縄のハジチ：文化復興とは何か
3. 学会等名 日本民俗学会第72回年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本芳美
2. 発表標題 報告：「沖縄のハジチ、台湾原住民族のタトゥー：歴史と今」展
3. 学会等名 2020第13回日台原住民族研究フォーラム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 桑原牧子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 306
3. 書名 「第12章 身体：イレズミからみるポリネシア社会の歴史」梅崎昌裕、風間計博編集『オセアニアで学ぶ人類学』	

1. 著者名 山本芳美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版局	5. 総ページ数 464
3. 書名 「第4章4-7 身体変工」「4-10 管理される身体や装い」河野哲也ほか編『顔身体学ハンドブック』	

1. 著者名 津村文彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 482
3. 書名 「不可視を『見る』、不可解を『語る』：東北タイにおける呪術と感覚経験」川田牧人、白川千尋、飯田卓（編）『現代世界の呪術 文化人類学的探求』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>山本芳美公式ウェブサイト  <a href="https://onsentattoo2020.wixsite.com/yamamotoyoshimi">https://onsentattoo2020.wixsite.com/yamamotoyoshimi</a>  「毛利清二の世界 映画とテレビドラマを彩る刺青展」公式X  <a href="https://twitter.com/MouriSeiji">https://twitter.com/MouriSeiji</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 芳美 (Yamamoto Yoshimi) (50363883)	都留文科大学・文学部・教授  (23501)	
研究分担者	桑原 牧子 (Kuwahara Makiko) (20454332)	金城学院大学・文学部・教授  (33905)	
研究分担者	山越 英嗣 (Yamagoshi Eiji) (00843822)	都留文科大学・文学部・准教授  (23501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大貫 菜穂  (Onuki Naho)  (20817944)	京都芸術大学・芸術学部・非常勤講師    (34319)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	南 玲子  (Minami Reiko)		
研究協力者	松嶋 冴衣  (Matsushima Sae)		
研究協力者	彭 宇潔  (Peng Yujie)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関